



筑紫女学園大学リポジット

The World of Ancient History Research Adopted
in the Novel FUETSUBO by Seicho Matsumoto

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 忠彦, OHTSU, Tadahiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/568

松本清張著『笛壺』の構成する古代史研究の世界

大 津 忠 彦

The World of Ancient History Research Adopted in the Novel
FUETSUBO by Seicho Matsumoto

Tadahiko OHTSU

はじめに

松本清張（1909〔明治42〕年12月21日～1992〔平成4〕年8月4日）の比較的初期作品には考古学に関わる人物物語が少なからずあり、それぞれの主人公あるいはその周辺人物には研究者としての多様な業績、例えば研究著書名が付加されて考古学専門家らしさを形作っている。筆者が「考古学もの三部作」^①と捉える最初期の松本清張作品にあつては、例えば「距離の女囚」（『オール讀物』、1954〔昭和29〕年3月）における藤川英夫（△△大学考古学教室の教授）著『日本原始社会の起原論攷』、「断碑」（『別冊文藝春秋』、1954〔昭和29〕年12月）の主人公木村卓治著『日本農耕文化の研究』、「石の骨」（『別冊文藝春秋』、1955〔昭和30〕年10月）の主人公黒津著『日本に於ける旧石器時代の研究』等々である。

もちろん考古学関連ばかりではない。「賞」（『新潮』、1957〔昭和32〕年1月）中の学者粕谷侃陸の著わした『古社寺願文の研究』は、「昭和のはじめ頃」に「学士院賞」を受けた設定となっている。

引続く時期の諸作品においてもしかり。例えば「月」（『別冊文藝春秋』、1967〔昭和42〕年6月）の主人公伊豆亨は「金印偽物説」を云々したために、学者としての地位を一時危うくするのであるが、それでも「東国条里制の研究」、「武蔵国名義考」、「北条氏康の武蔵紀行について」、「武蔵国古代地理論攷」、「少彦名命と古代常陸国」、「房総半島の歴史的考察」、「秩父地方における奈良朝時代の人口」、「甲斐国志雑考」、「新釈武蔵地誌稿」のような執筆業績を成した設定となっている。

また、実在した考古学者に依る「モデル小説」然とした作品も少なくはなく、松本清張自身がそのことを明示する場合もある：

- ・「私（＝松本清張、引用者注）の初めのころの作品に『断碑』というのがある。昭和三十年に書いたもので、私としては最も哀惜している小説の一つである。主人公は、若くして死んだ考古学者森本六爾夫婦をモデルにした^②」。

確かに、作品『断碑』において、その主人公木村卓治の生没年、畝傍中卒、東京高等師範学校勤

務等々はそのま森本六爾（1903～1936年）の経歴と同じであるし、また、物語中の論文集名『日本農耕文化の研究』は『日本農耕文化の起源』（森本六爾、1941年）を、そしてまた、物語主人公木村卓治が「中央考古学会」を立ち上げて機関誌「考古学界」主宰したことは、森本六爾が「東京考古学会」の主幹として機関誌「考古学」に尽力したことを彷彿とさせる⁽³⁾。主人公周囲の人物においても、「東京帝室博物館歴史課長」や「京都大学助教授」や「京都大学総長」とされるそれぞれの人物名やかれの人物像は、日本考古学史上の実在人物と微妙な相似具合をみせ、『断碑』をしてまさに考古学「実録史」然となっている。

『石の骨』についても「大体事実通りである。この主人公は、まだ第一線で活躍中の学者なので実名は公に出来ないが、学界では官僚主義がどのように在野の学問を圧迫しているかを書いてみたかった⁽⁴⁾」と著者は述べている。

このような「リアリティ」もまた「社会派」推理小説家松本清張の真骨頂とすべきか。その程度があまりにも徹底しているので、時として「空想」と「現実」との境をあたかも行ったり来たりするかのような幻惑を覚える⁽⁵⁾のは筆者に限らないはずである。そして愛読者にとってのこの魅力の源泉のひとつが、作者自身の「調べる」⁽⁶⁾にあたっての徹底した周到さである：

- ・「私はこの不遇な才能ある考古学者（＝森本六爾、筆者註）を調べるために今までいちばん多くの人に会っている（『松本清張短編全集 3 張込み』（1964年、光文社）所収の「あとがき」）」
- ・たとえ筋は空想であっても、小説には現実がなければならないから、部分についてはできるだけその方面のことを取材する。人と会うこともあるし、背景となっている土地にでかけることもある。むろん、参考書も読む。それでわからなければ専門家のところへ聞きにゆく。面倒な理論も、専門用語や専門的表現をのけると、常識的なものに還元できると私は思っているの、納得がいくまで聞く（「エッセイよりー私の小説作法ー」『随筆 黒い手帖』（1961年、中央公論社））。

このように松本清張の筆法が「たとえ筋は空想であっても、小説には現実がなければならないから」、「調べる」ことの範囲はいきおい広まり精緻・厳密化する。したがって、テーマによっては主人公やその周囲について時として「暴露的」で機微をうがち、畢竟、作品を極めて濃密ながら暗然たる世界にしている場合がある。たとえば作品「笛壺」がその好例のひとつであろう。

I. 「笛壺」の古代史研究要素ーその1：学者畑岡謙造の原点設定

「笛壺」（『文藝春秋』1955〔昭和30〕年6月）は、発表年および内容的には先述「考古学もの三部作」に引き続く松本清張初期作品例であり、例えばつぎのような書評を見ることができる：

- ・「『笛壺』は一応功なり名とげた学者がある種の悪女にひっかかって、学界から顛落する話である。学問によって堅固に身を鎧っているかにみえる大学教授も、一皮はげばただの男性、という外貌のもとに、学問の魅力と女性の魅力とを等価の次元にひきなおしてみせたものだ。⁽⁷⁾」
- ・「燃え尽きた老学者の孤独を描いて鬼気迫る学究物の秀作⁽⁸⁾」

確かに、「笛壺」は主人公畑岡謙造（「今年六十九」歳）の研究者としての経歴（研究歴）を軸に、なぜ、どのように「学界から顛落」せねばならなかったのかを説いている。そして、「空想」（虚構）と「現実」（史実）が、互いに厳格な境界を画することなく相混ざり合う様相を呈して、物語の展開要所を構成しているところがある。

まずは、「二十五六のころ、おれ（＝畑岡謙造、引用者註）は福岡県の田舎の中学校教師だった」時。この文意が「戦前」を表わしていることは、主人公畑岡謙造の、ある意味で恩師たる「淵島由太郎」（後述）の肩書のひとつが「東京帝大教授」であることから判断できる。学者畑岡謙造の研究者人生は、この恩師との出会いがその前史を形成していると捉えることができる。

主人公は「福岡県の田舎の中学校教師だった」頃、「日ごろから郷土史などを調べて」いた。このことが淵島東京帝大教授を、その調査対象地として挙がる「筑紫国分寺址」、「筑紫戒壇院址」、「観世音寺址」に案内・説明する好機に繋がったばかりでなく、「すっかり先生はおれが気に入って」しまう。なぜならば、若き主人公畑岡謙造は「どこに行っても、おれは自分の調査した資料を出して説明した」からである：

・礎石の位置の実測図とその復元図、典拠による相違や実証、出土品の位置、古瓦の拓本、過去帳や寺仏の研究などあますところなくしゃべった。

主人公畑岡謙造が淵島東京帝大教授を案内した諸遺址（「筑紫国分寺址」、「筑紫戒壇院址」、「観世音寺址」）より推して、物語のいう「福岡県の田舎」を太宰府と捉えて良いとすれば、この畑岡謙造の研究者としてのいわば前史部分にあたるこの行ないは、戦前期における在野研究者のひとり池上年（1891?～1978年）の業績を彷彿とさせる。それは、「福岡県立中学修猷館」（当時）の教員による太宰府都府楼遺跡の測量調査であり、学会誌に著された報文⁹⁾の緒言には以下の事項を読み取ることができるからである：

- ・「都府楼の古蹟は元來世にも名高きものなれば（中略）其現状の詳報せられしは寡聞なる余の未だ知らざる處（中略）余屢々この地に遊び、其の遺跡を探究し得たる所尠からず。」
- ・「本篇の目的は現状の詳報と正確なる實測圖とを提供するにあり。」
- ・「本編挿入せる所の圖面は悉く余が前後十數回に亙りて測定せるものにして、中には改測兩三回に及びたるものも尠からず。此際縣立工業學校及修猷館生徒諸子各々トランシット、ポール等を取り、能く指揮に従ひ、確實に物にあたり實測を助けられ（後略）」

ちなみに、後年の報道記事に拠れば、「年氏は一九一二年、現在の京都工芸繊維大学を卒業、（中略）一八年、岡崎市立商業學校に赴任した。（中略）二六年、岡崎石造美術研究所を創設。三河郷土史研究会をつくり、古墳の発掘などを手がけた¹⁰⁾」。

池上年その人の経歴に比して、小説「笛壺」のモデル云々とはおよそ考え辛いながらも、小説の舞台（太宰府）、時代（戦前）、人物像（中学校教師）そして遺跡調査の事実という相共通点は、あるいは作品構成に意図されていたのではないかと、これはいまのところ筆者の推察でしかない。しかし、敢えて我田引水的に捉えたと、小説「笛壺」における主人公の居処表現「三方が山に囲まれ、

一方は平野がひろがっている鄙びた地方であった」における「三方が山に囲まれ」は、池上報文の第2章「所在地の地勢」にも同じ描写法を見出すことができるのである：

・「この地四王寺山を負ひ、東は筑山、西は藏司の小丘に連なり、北部漸高く、南部は平坦に、三方山に擁せられたる方約一千尺の地にして、」

松本清張の諸作品における物語舞台（地域）描写の妙、深長性について筆者はこれまでにその一端を考察したことがあるが⁽¹¹⁾、「笛壺」における「三方が山に囲まれ、一方は平野がひろがっている」とは、しばしば作者が指摘する「風水説による相地⁽¹²⁾」を示唆しての表現と考えられる。

Ⅱ. 「笛壺」の古代史研究要素－その2：学者畑岡謙造の研究大成

「田舎の中学校教師」時代の業績を淵島由太郎東京帝大教授に見出された畑岡謙造は、上京後、「東大の史料編纂所員」となり「八年間、先生の下で『国史資料集成』の編纂の仕事に過ごした」。「あくまで学者を志し」、「一生をかけるような研究」を志す畑岡謙造は、やがて「延喜式の研究」を研究主題に設定。「二十数年間という長い歳月」をかけ大成した論文「平安初期の器物と生活技術の研究－特に延喜式を中心として」は「学士院恩賜賞」となる。この間、主人公畑岡謙造の「上代文化の研究学者」としての取り組みは、「もっぱら“延喜式”に書かれた神饌品の考証にあった」が、その充実ぶりの一端を以下のような具体的活動歴を挙げることによって物語は表している：①「史学雑誌などに寄稿」、②「（高輪に在る）S侯爵家の家史編纂所主任」、③「法隆寺の再建非再建の論争にも一役買って出された」、④「大学に講師として出向」、⑤「各地の式内社を調査」するための地方出張、⑥「或る女学校の国語科の教師たちの集まりに出て講演」

「笛壺」の主人公が「昭和×年」に「帝国学士院恩賜賞」を受賞するという設定は、後の松本清張作品「賞」（『新潮』1957〔昭和32〕年1月）における登場学者である粕谷侃陸の著作『古社寺願文の研究』が「昭和のはじめ頃、三十前」に「学士院賞」を受賞したという設定と相共通するが、これらはいずれもあくまで物語上の架空のことである。

①に謂う「史学雑誌」は、これを史学関係の学術雑誌という意味ではなく、固有名詞「史学雑誌」と捉えれば、帝国大学文科大学が創設（1889年）の「史学会」が、同年より発刊継続する機関誌『史学会雑誌』ということになる。いずれかであるかは断定し辛いですが、次のくだりから、後者の可能性は否定できない：「おれ（＝畑岡謙造、引用者註）を有名に仕立てなければならぬと思ったか、先生はしきりと史学雑誌などに寄稿することを慫慂するようになった。」

②に謂う「S侯爵家」は「旧藩主」、「旧大藩華族」等で見出されるが、その在所「高輪」に拠れば旧長州（毛利）藩の「高輪（常磐）邸」を彷彿とさせる。もっとも、その爵位「侯爵」は実際が「公爵」であった事と異なる。「S侯爵」の略字「S」が全く異なる事については、他の事例に見られるように⁽¹³⁾、これは作者松本清張の恣意的改変であると考えられる。

③に謂う「法隆寺の再建非再建の論争」は、学史上実在の論争であり、学史的には、昭和14(1939)年の石田茂作らによる発掘調査⁽¹⁴⁾によってひとつの決着をみたと思えられている。この「論争」へ

の言及があることは、物語の時代設定（主人公畑岡謙造の研究者としての主たる時期が昭和10年代以前）を示唆している。ちなみに、「上代文化の研究学者」という表現は、石田論文の所収論集題名（註14）と相共通するところも注意したい。

Ⅲ.「淵島先生」の設定具合

主人公畑岡謙造の人的環境の設定具合には、松本清張の持論ともいえるべき「小説には現実がなければならぬ」とする流儀が、独特の世界すなわち「空想」と「現実」との境をあたかも行ったり来たりする」（前出）状況を形成している。「笛壺」では「二十五六のころ、おれ（＝畑岡謙造、引用者註）は福岡県の田舎の中学校教師だった」時以来、69歳の現在に至るまでのライフストーリーの構成要素として展開している。ここにおいて古代史研究的要素の活用が、例えば主人公の「人的環境の設定具合」においてもその構成をみることができる。

物語では、主人公畑岡謙造を研究者世界に導き入れたのは「淵島先生」こと淵島由太郎であった。主人公との初対面当時、「先生は東京帝大教授であり、東大史料編纂所長を兼ね、文部省嘱託であった」。そののち淵島先生の肩書はさらに加わる。すなわち帝国学士院会員、維新史料編纂会委員、国宝保存会委員、神社奉祀調査委員、教育審議会委員、史跡名勝天然記念物保存委員会委員などであり、いずれも明治・大正期以降、昭和22、24年頃まではそれらの名称で実在していた。淵島由太郎の著書とされる「日本文化史攷」や「中世封建社会生活と文化」については、「学者たちを満足させる学問的な研究ではなかった」と主人公は断じているが、同名の著作物は、管見の限り、実在はしない。このような淵島由太郎の下、主人公は8年間、東大史料編纂所において「『国史資料集成』の編纂の仕事」に従事したこととなっている。

「淵島先生」がいったいだれを「モデル」としているのか。主人公は「決して第二の淵島由太郎にはなると決心していた」。そのような思いに至った主人公の「淵島先生」評は、たしかに厳しい：その著書の学界評が芳しくない（前出）、「肩書きは年々に装飾品のようにならぬが、そのわりに先生の学問上の業績には見るべきものがない」、「いつのまにか先生は顔役となり、優れてはいるが圭角のある学者⁽¹⁵⁾よりも先に地位ができてきた」、「ぬけめなく自分の勢力も養った」。主人公は淵島由太郎を「政治家でしかない」と断じている。すなわち、主人公畑岡謙造の論文が恩賜賞となった頃、「淵島先生」は「政治の上層部とも結び、学界のボスともなっていた」。

文芸評論家のなかには「戦前の日本史学界の大御所で、松本清張の小説『笛壺』に当時のボスぶりが辛辣に描かれている⁽¹⁶⁾」として、該当する実在の人物名を明示する事例が無いわけではない。可能性としてはそのように推定できなくもないものの、松本清張自身がその具体的人物名を公に挙げたことは、管見の限り、ない。

Ⅳ.「笛壺」は「楽器ではない」？

作品題目となっている「笛壺」に関しては、物語中に次のように登場する：

- ①（博物館展示品「祝部土器」を、同行者でのちに主人公の情婦となる貞代に説明する場面）「わりに小さな壺形の土器で、胴にまるい穴があいていた。壺ですか、と言うから、水をいれる壺なら水が流れ出てしまうから壺ではあるまいと説明してやった。では、なんですか、と言うから、神前の祭祀品には違いないが未だに用途のわからぬ品物だ、しかしあの穴を吹くと、音が出るから楽器ではないかという説がある、名前も笛壺とよぶ人があると言ってやった。」
- ②（貞代が、胴部の穴に竹筒を挿しこんで吹いたのか、と問うたことに対し）「あの穴に口をつけて吹いたんだ、と説明しかけて、はっとなった、あの穴に竹筒を挿しこむ、この着想は今まで気づかないことだった。するとこの壺に竹筒を挿しこんだときの格好がおれの眼の前にうかんだ。それは水さしのような形であった。おれは、瞬間、これは楽器ではないと直感した。」
- ③「“延喜式”の神祇部に神饌品としてよく出てくる“匱”という、今まで誰にもわからなかった廃字の実体を、この“笛壺”に求めたのは、（後略）」
- ④「楽器ではない、式の文中に「酒垂、匱、等呂須伎」とたいていならべて出てくるように、これは上から酒を注ぎ竹筒に口をつけて吸う道具なのだ。」
- ⑤（梟の啼き声を聞いて）「あの声を聞いていると、ふとおれ（＝畑岡謙造、引用者註）は延喜式に記されてある匱を思いだした。上部の縁の高い土器の壺である。あの胴の穴に口をつけて吹いたことはないが、吹けばきっとあのような音が出るのではないかという気がする。」
- ⑥「この“笛壺”に竹筒を挿しこむのではないかと言ったのは貞代であった。おれはその暗示から出発して匱の実体を知った。」
- ⑦「おれはいつか博物館に行き、係りに頼んで陳列品のあの“笛壺”がどんな音を出すか吹かせてもらおう。」

延喜式の研究者畑岡謙造（主人公）の「わりに小さな壺形の土器で、胴にまるい穴」のある「祝部土器」（＝須恵器）に対する見解の推移（上記①～④）を、あらためて記せば次のようになる：

当初、〔用途のわからぬ、神前の祭祀品（壺ではない）。一説では穴に口をつけて吹く笛壺。〕と理解していた。―（その後）→、貞代の問いかけを機に〔楽器ではなく、“延喜式”の神祇部に神饌品としてよく出てくる“匱”であり上から酒を注ぎ竹筒に口をつけて吸う道具〕と解釈。つまり、「笛壺」＝延喜式にいう「匱」＝「上から酒を注ぎ竹筒に口をつけて吸う道具、これこそ匱の実体」となる。すなわち「楽器ではない」のである。

上記⑤～⑦は、物語における時制がこの作品のはじまりにもどる。69歳現在の畑岡謙造が、かつて「笛壺」＝笛をひとつの伝聞説として保持していた頃、すなわち貞世の出現により人生が一変する以前の自分を、いまあらためて懐旧する心境の表徴行動と理解できるのではないだろうか。

この形式の須恵器、すなわちこんにちの考古学でいうところの「甗（はそう）」について、畑岡謙造の解釈を物語化した松本清張自身は、作品創作の契機についてかつて次のように記している：

「私の初期の作品には、考古学者の世界に題材を取ったものが多い。『断碑』『石の骨』『笛壺』などがそうである。これらは、ある考古学者から聞いた話を基にして、自分でもいろいろ調査して小説に仕立てた。（中略）『笛壺』は、ある日、古代祭器の「ハゾウ」の実物を見て思いついた。これは須恵器の一種だが、一種の酒器である。胴に小さな円い穴があいていて、その用途については

在来疑問とされていたが、近ごろでは、朝鮮民族がよく使う酒器の一種だと分った。つまり、その穴に竹筒を差し込み、中の酒を口に吸い上げるのである。ところが、その穴に直接口を持って行ってふくと笛のような音がする。笛壺というのはそこから思いついた私の命名だが、狙いは、その壺に一種の浪漫性を盛りたかったのだ。以上はヒントとはいえないが、或る学者の話を聞いているうちに思いついたのである。⁽¹⁷⁾」

「近ごろでは、朝鮮民族がよく使う酒器の一種だと分った」とあるが、これは「笛壺」発表（『文藝春秋』1955〔昭和30〕年6月）後かなり時間を経過した時点での事。筆者は、「笛壺」発表当時頃までの「ハゾウ」に関する解釈が如何様であったか、未だ十分には辿り得ていない。しかし、いわゆる「古器名研究」にあつては、たとえば「当初は、『古事記』や『日本書紀』、それに『延喜式』などに見えている古器名をそのまま、出土土器の呼称として用いていたが、このような単純な見通しはやがて行き詰まりを見せた。小林行雄・原口正三の両氏によれば、土器の称呼に記紀・万葉の古語をあてるという方針では古墳時代の須恵器にあてべき古語が足りず、結局は『延喜式』からの古語の借用や、擬古語、新造語、折衷語を創出することになったという⁽¹⁸⁾」との評をうかがい知ることが出来る。

ここに言及の「小林行雄」（1911〔明治44〕～1989〔平成元〕年）は、とりわけ弥生時代～古墳時代について、考古遺物資料を考古学手法に則り精緻に体系化した研究者であり、本格的考古学事典の嚆矢ともいえる『図解考古学辞典』の編者。小林自身の著した「はそう はさふ 甕」の項はつぎのように摘記することができる（「」付記述は、原文通りの引用）⁽¹⁹⁾：

- ・液体の容器。竹管などを胴部円孔に挿入して、注器として使用するものと推定されている。
- ・「竹管を用いて内容物を吸いあげるとか、孔に口をあてて吹きならす楽器であるなどというのは、俗説である。」
- ・「須恵器にこの器形があらわれたのは朝鮮の影響と思われる」。土師器に同例あり。
- ・「この器形を甕とよぶことは、『延喜式』に陶匱の口を作る料として篋竹（のだけ）を計上していることと、『倭名類聚鈔』に匱は椀であり、注口をなかば挿入するから半挿（はんぞう・はそう）だという説をのせていることによるが、『延喜式』には甕に「つちたらえ」の訓を付している個所もあるので、適否は保証しがたい。」

この辞典の解説は、その編著者に由っても、発刊時（1959〔昭和34〕年）における最も信頼すべきものであり、もちろん詳細未詳の問題は残るものの、「甕」を考察・研究するうえでは『延喜式』参照が不可欠であることを、後述のごとく、あらためて明示しているのである。いま、小説「笛壺」の発表年（1955〔昭和30〕年）に注視すれば、作家松本清張が小説の主人公に『延喜式』研究を目覚めさせ、その研究途次において「甕」に遭遇させるという筋立て、加えて、この器を丁寧に採りあげてその関わりで『延喜式』を参照する形式を執拗なまでに著している様態は、まさに「考古学者の世界に題材を取ったもの」で「自分でもいろいろ調査して小説に仕立てた」（前出）ものの好例のひとつとみなしてよいであろう。

V. 戦前期の「甗」解釈との関連性

「笛壺」主人公畑岡謙造が「福岡県の田舎の中学校教師だった」25、6歳頃に大宰府の遺跡調査を行なったとする小説記述を、仮に、戦前の類似する史実である池上年（先述）の業績に符合させれば（すなわち物語中の「二十五六のころ」を池上による大宰府調査の1913年として）、畑岡謙造は1887年あるいは1888年（明治20年あるいは明治21年）生まれと試算することができる。そして、1939（昭和14）年に一応の決着をみたと考えられている「法隆寺の再建非再建の論争」に、物語中では畑岡謙造もそれまで「一役買って出された」云々とあるから、これを畑岡謙造が51、2歳頃の決着事と見做せば、40歳代に「法隆寺再建非再建論争」の発言者を勉めたと読むことができるかもしれない。

このように試算すると、主人公畑岡謙造が博物館展示品「笛壺」に出会うことについての「おれはその時四十六歳」という記述が、物語の進行において、無理なく適合するとみなすことができる。つまり、主人公畑岡謙造が「博物館に祝部土器を見に行」き、「笛壺」にその後の研究の端緒を見出したのは1933、4（昭和8、9）年ということになる。

物語の時代（時期）設定を上述のように考えた場合、主人公畑岡謙造の「そのころ、研究はもっ

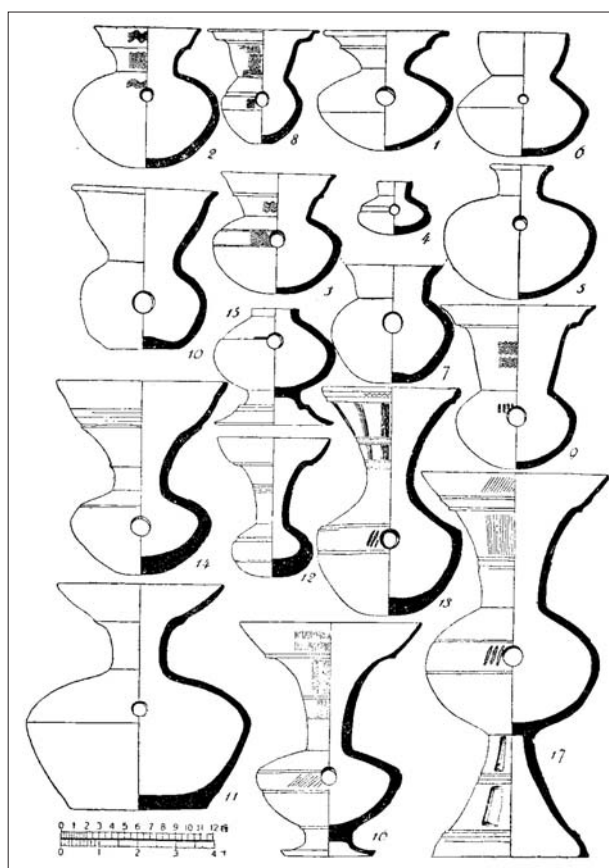


図1.「甗」の実測図集成（角田1938より一部改変）

ぱら“延喜式”に書かれた神饌品の考証にあった。それでこういう考古学の遺物の陳列を毎日見に通っていた」、「“延喜式”の神祇部に神饌品としてよく出てくる“匱”」云々という物語記述は、戦前における古代史研究（史）の実際上どのようにみなすことができるだろうか。

角田文衛（1913～2008年）は、戦前、「土師器および須恵器は、わが国の古墳時代における最も著しい遺物のひとつでありながら、従来殆ど纏まった研究が発表されていない」として、「甗」の起源およびその変遷を、角田言うところの「古代学の方法論を樹立する」ための作業例のひとつとして論じた（角田1938、図1）⁽²⁰⁾。この「甗」を『延喜神祇式』、『皇太神宮儀式帳』、『和名抄』等の古文書文献に照らし論考するにあたっては「主として三宅米吉『上古の焼物の名称（二）』（『考古学雑誌』第一卷第十二号掲載、東京、明治四十四年）に拠る」旨の註記

が明示されている。

しかしながら、物語「笛壺」には、用語（＝古器名）としての「甗」は一度も登場せず、主人公畑岡謙造の問題視する「祝部土器」は終始「匱」である。これについて「角田1938」の下記要所は、物語「笛壺」の考古学的読み方として極めて参照に値する明解となっている：

- ・『延喜神祇式』に散見の「匱」は「水注ぎ乃至酒注ぎ」と推察される。
- ・享保本における読みは「モタヒ」、「ハサフ」とあるが、後者は「缶」のことであるから「匱」の読みは「ハサフ」。『皇太神宮儀式帳』に拠っても「匱」の古訓は「ハサフ」。
- ・『和名抄』割註に「俗用椀」とあるが、「椀」は木製の水注ぎであるから、「甗」は陶製の水注ぎ。
- ・「上代の窯器」における「水注ぎ」は「短頸および長頸の注口付埴しかな」ので、「ハサフ」＝「匱」は、したがって「甗」。

物語主人公畑岡謙造の「“延喜式”に書かれた神饌品の考証」研究において大きな画期となったらしい考古学用語「甗」との出会い時期（1933、34年当時と試算）において、これを物語中では「匱」と表現していることについては、こんにち一般に弥生時代末期の注口付土器と峻別して、あくまで外来の須恵器の一形式に「甗」をあてる見方からすれば齟齬をきたしていないわけではない。しかし須恵器ではなく、物語中には「祝部土器」と表記していることと合わせ考慮すれば、考古学史上首肯出来なくもない⁽²¹⁾。はたして松本清張がそこまで意図していたかは疑問ながら、「“延喜式”に書かれた神饌品」、「匱」、「祝部土器」の組み合わせには、先に試みの算出年代「1933、4（昭和8、9）年」頃と矛盾しないといえよう。

おわりに

「笛壺」（1955〔昭和30〕年）に登場する考古資料やその解釈をめぐる研究者の世界が、物語設定時代や発表された頃の研究状況実態に照らして、如何ほどに迫真性をもって描かれているかは、後年1958（昭和33）年にその分野の第一人者が著した「古器名考證」⁽²²⁾に相照らすと瞭然である。この論考の説くところに拠れば、『日本書紀』、『古事記』、『万葉集』記載から、「當時用いられていた器名をある程度知ることができ」、「その用途がわかることと、これらの器名の多くが、そのまま『延喜式』などにもみられるものであるところ」より、「一應実際の土器の器形にあてはめることが試みられた」。「しかし、古墳出土の須恵器の器形の種類は、これだけにとどまらないので、べつに甗、平瓶などの名称が、『延喜式』のうちから探し出されて、同時に使用されることになった」（下線は筆者による）という解釈が、「たいした異説の出現をも見ずに今日にいたった」、すなわち「笛壺」発表当時の状況であったと判断してよいであろう。

作品「笛壺」のテーマは、文芸評者によれば、決して考古学や古代史ではない。あくまでも作家松本清張独特の考古学・古代史世界表現のひとつが加味されている、というまでである。ところが、あらためて「笛壺」を読み進めるとき、松本清張の考古学履歴におけるあるひとこまを想起せざるを得ない。それは「昭和17（1942）年、古月横穴古墳の近くの民家にて セルフタイマーで撮影」

と説明文の付された挿図⁽²³⁾の状況である。この淡い褐色写真画面中、縁側に座してカメラに視線を向けた松本清張の背景を構成する前面ガラス張りの戸棚には、多くの「須恵器」資料が収納されている。松本清張年譜に照らせば、いよいよ考古学への興味が具体的に拡大するところであった。そして、この写真に対応する、当時を振り返った次のような本人の回想記がある：

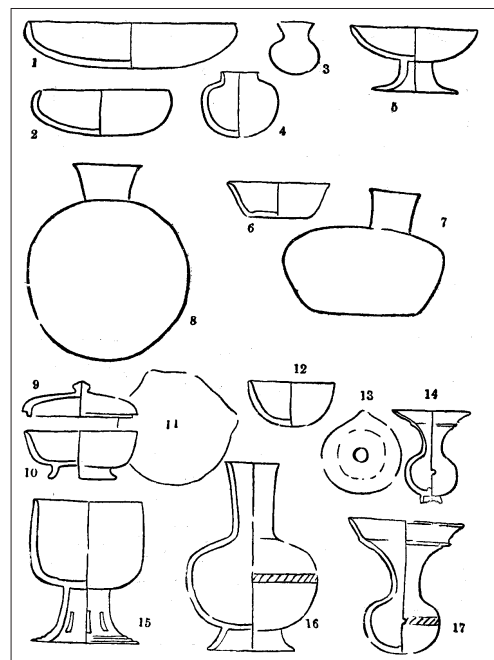
・「もともと歴史に興味を持ったのは、昭和十七年ごろからか。当時、中古のカメラを買ってね。風景を写そうと思ったが、北九州は要塞地帯だから写すことができない。そこから離れなくちゃならない。折尾以西、南は筑豊炭田あたりだったら大丈夫。そこで、休みの日には、自転車に乗って遠出する。そんな時、中間（なかま）町の方まで足をのばした。遠賀川流域だ。すると、そこには横穴古墳がいっぱいある。一軒の農家に立ち寄ったら、軒下に土器が置いてあって、この土器はなんだろうと思ったのが始まりで、だんだん考古学に興味を持ち始めた。⁽²⁴⁾」

33歳当時であろうか、松本清張に「なんだろう」と思わせしめ、爾後に連なる考古学への具体的端緒となったらしい「この土器」こそ、古月横穴古墳（6世紀後半から7世紀後半の築造）出土の「須恵器」であり、胴部に穴のある「甗」も含まれ松本清張が実見した可能性は高い（図2、3）。そしてまた、同地域は、松本清張による古代史・考古学作品でしばしばその引用・参照のある『太宰管内志』の著者伊藤常足（1775～1858年）の故地であることも、想像するに、「中間（なかま）町の方まで足をのばした」動因であったのかもしれない。



上：図2. 古月横穴出土資料写真。中段の右より3番目に須恵器「甗」が見られる。⁽²⁵⁾

右：図3. 古月横穴出土資料実測図。番号14および17は須恵器「甗」。⁽²⁶⁾



ところで、笛壺は「笛壺」主人公の畑岡謙造が言うように楽器ではなく、また、考古学辞典の解説にあるように「楽器であるなどというのは、俗説」（前出）なのであろうか。いま敢えて、興味ある「情報」を備忘のため、ここに記しておきたい：

・「考古学者の間では「酒器」ということが定説になっているが、この穴に口を付けて吹くとホラ

貝のような音が出る。松本清張小説には「笛壺」という名前で出てくるといふ。備前焼の陶工好本敦郎さんがこれを復元し、坂口さんが「岡山はそうの会」を作りこの普及に取り組んでいる。⁽²⁷⁾」

【註】

1. 大津忠彦 2013「松本清張文学作品における「考古学もの」への契機・始動と昇華」『福岡大学考古学論集2』455-468頁 福岡大学考古学研究室
2. 1961（昭和36）年11月17日付「朝日新聞」（東京版）朝刊所収 シリーズ「わが小説」の第14回目
3. 註1
4. 『随筆黒い手帖』講談社文庫103-104頁所収「創作ノート（二）」より。初出は『宝石』1959年1月号。引用文中に「実名は公に出来ない」と実名の伏せられた主人公に関して、『松本清張短編全集3張込み』（1964年、光文社）所収の「あとがき」（末尾に「昭和三十八年松本清張」とある）にはつぎのように明記されている：「『石の骨』のモデルは、早大教授の直良信夫氏である。直良氏が明石海岸に静養中、古代の人骨を発見し、以来“明石原人”をテコにして旧石器文化説を唱えだしたが、当時、これはアカデミズムの嘲笑的になっていた。直良氏は恵まれない学界の環境に置かれて悪戦苦闘されたが、今日の考古学はすでに日本にも無土器文化時代があったのを承認して、直良氏の業績を認めざるを得なくなっている。氏のために喜びにたえない。」
5. 大津忠彦 2009 小説『内海の輪』に読む考古学 『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第4号95-107頁 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部
大津忠彦 2014 小説『松本清張著『鷗外の婢』にみられる考古学的虚実構成』『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第9号95-107頁 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部
6. 作品ジャンルは異なるが、主人公に同様の気質を持たせている：
・「久間隆一郎があらゆる面に好奇心が強く、詮索的な性分の持主だったことだ。彼の作品にもその傾向が顕われている。一つのものと取り組むと、久間監督はあらゆる調査に手間を惜しまない。作品を大事にするという気持ちからであったが、もともと、久間隆一郎には、ものを調べるといふ興味が強いのである。（『不安な演奏』1961年3～12月、『週刊文春』）
・大体、私には興味を覚えたことはほとんど打ちこんで調べてみないと気がすまないという性格があった。それは子供のころからそうで、そのためシツコイと云われたこともよくある。他人（ひと）から見たらばかげたことでも私はその間、ほかのことは全く手がつかないほど熱中するのである（『屈折回路』1963年3月～1965年2月、『文藝界』）
7. 平野謙 1965 「解説」新潮文庫『或る「小倉日記」伝 傑作短編集（一）』所収403～404頁
8. 郷原宏 2005 『松本清張事典 決定版』角川書店 153頁
9. 池上年 1918「都府樓址の研究（上）」『考古学雑誌』第8巻第7号日本考古学会379～398頁
10. 朝日新聞1993年9月8日朝刊（東海総合面）所収：毛井正勝「『行方不明の神領銅鐸』その後（えんぴつ最前線）」
11. 大津忠彦 2013 「松本清張初期作品における地域描写の一特性とその後景」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第8号101-112頁 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部
12. たとえば、『私説古風土記』所収「出雲国風土記」では、次のように述べている：
・「北に山を負い、東と西の丘陵に抱かれ、南がひらけて水があり、その中が平地というのは、まさに「風水」説による吉祥の地相というべきである」（『松本清張全集』55、166頁）
・「風水理念による相地法は平城京だけでなく、「遠の朝廷」の大宰府の地勢にもあてはまる」（『松本清張全集』55、167頁）

13. 「賞」（1957（昭和32）年）において、「この北九州は中都市が数珠のようにつながっていた」と記された「M市」、「K市」はそれぞれ当時実在の門司市、小倉市に当てはまるが、「私はK市からH市に行った。（中略）H市の半分は、巨大な黒い工場であった」の「H市」は、略字「H」に該当する市（当時）は実在を見いだせない。
14. 石田茂作 1941 「法隆寺若草伽藍址の發掘に就て」『日本上代文化の研究：聖徳太子一三二〇年御忌奉讃記念論文集』法相宗勸学院同窓会
15. 「圭角のある学者」という表現は、「石の骨」（前出）の主人公黒津が「己こそ先生の心に一番近い男だと信じて悪いだろうか」とまで心酔する宇津木欽造（故人）に関して次のように回想する個所に、鋭敏な実力ある研究者の性格として見出される：「生前の先生は日本のどの考古学者をも認めては居られなかった。人は先生の狷介不羈を云うが、そういう圭角のある性格に仕立てたのは日本の学界であった。学界が先生を白眼視したのは、その鋭い才能への嫉妬を、先生の不規則な学歴への蔑視にすり替えたのだった。先生はそのため、どれほど苦しめられたか分らなかった。」
16. 谷沢永一 1978 『完本・紙つぶて』文藝春秋 107頁
17. 松本清張 1983 講談社文庫『随筆 黒い手帖』103-104頁：「推理小説の発想」所収「創作ノート（二）」
18. 森川実 2015 「土師器のうつわ、須恵器のうつわ—奈良時代の食器構成に関する一考察—」奈良文化財研究所編『官衙・集落と土器 1 宮都・官衙と土器（シリーズ第18回古代官衙・集落研究会報告書）』
19. 水野精一、小林行雄編 1959 『図解考古学辞典』東京創元社。引用は1974（昭和49）年発行の第7版。
20. 角田文衛 1938「甕について」『考古学論叢』第9輯 考古学研究会（『角田文衛著作集』第1巻所収）
21. 小林行雄 1952『考古学概説』東京創元社（第25章 古墳時代の土器）
22. 小林行雄、原口正三 1958「古器名考證」（後藤茂樹編『世界陶磁全集』第1巻河出書房新社）。引用部は271-272頁所収。
23. 北九州市立松本清張記念館 2013『松本清張記と邪馬台国』4頁所収
24. 「文学の森 歴史の海 松本清張氏に聞く（5）裏道を歩く人間に興味（連載）」讀賣新聞（1990. 11. 16 東京版夕刊）
25. 1928 『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書 第三輯』所収「古月百穴」、図版「第十二版」
26. 1928 『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書 第三輯』所収「出雲百穴」、図版「第十四版」（これについては「古月百穴」の報文中に補記がある：「紙面の都合上古月土器數點の圖を出雲の部なる第十四版に挿みたり（後略）」）。なお、この報告書では当該の須恵器「甕」を「吸壺」と名称している。
27. 「唐丹希望基金2016」EEC 通信73号2016- 8 <http://eec-2020.com/tushin/73tushin.pdf>

（本論をまとめるにあたり、松本清張の旧蔵資料・蔵書に関して、北九州市立松本清張記念館学芸員小野芳美氏より御教示頂きました。記して御礼申し上げます。）

（おおつ ただひこ：アジア文化学科 教授）